

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

***** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。
無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 学術俯瞰講義
Copyright 2015, 佐藤俊樹

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series
Copyright 2015, Toshiki Sato

桜花の時空

✿東アジアの花の環✿

佐藤俊樹_総合文化研究科
@東京大学学術俯瞰講義 150925

0. 心情*heart*と論理*head*

桜をめぐる「歴史の衝突」

- 桜の春日本の代表的な景観
 - 日本らしさの象徴
 - 「日本人は昔から桜を愛してきた」
-
- 桜の春は日本の代表的な景観
 - 特に東京は桜の都

カンヒザクラ



2015/9/25

桜花の時空_東アジアの花の環_学術俯瞰

河津桜



寒桜



河津桜(花期終わり頃)



陽光



オオシマ系[白山旗桜?]



エドヒガン





オオシマザクラ





染井吉野(駒場 / キャンパス)





夜桜にはまた別の風情が...





八重紅枝垂



- ところが最近は
- 桜をめぐって国際紛争が勃発.....
- 韓国では「桜は韓国の花」: 染井吉野は済州島が起源
- 中国では「桜は中国の花」: ヒマラヤから唐代に日本へ
- 毎度お馴染み東アジア三国志 →ここでも「歴史の衝突」が^^;;

- 「日本は韓国起源説に対抗してソメイヨシノの自生地を探しだすため全国をくまなく訪ねてみたが失敗し、誰かが交配して作った栽培種と結論づけた。（中略）一方で漢拏山の王桜は野生種だ。日本と韓国の王桜とソメイヨシノは形態は同じだが、自生地が漢拏山にしかないなら、済州の王桜は日本のソメイヨシノの元祖だ」（原文ママ）
- 『ハンギョレ』150404「[記者手帳]韓日のソメイヨシノ起源論争はなぜ終わらないのか」
<http://japan.hani.co.kr/arti/culture/20212.html>より

- 「多くの史料が桜の起源は中国だと証明している。…日本にはもともと桜はなかった。日本の権威ある専門書『桜大鑑』には、桜の原産地は中国で、日本には唐代にヒマラヤ山脈地域から伝わったと記されている」(中国桜花産業協会代表・何宗儒氏)
- 「簡単に言えば、桜は中国で生まれ、日本で発展した。韓国は何も関係ない」(中国植物学会植物園分会理事・張佐双氏)
- 『RecordChina』150330配信記事「桜は中国で生まれ…」www.recordchina.co.jp/a105198.htmlより

- それに対して日本では「またか.....」
- どう考える？ →複数の解決策
- 一つはより厳密な科学的解明
- 1) 染井吉野の父系はオオシマザクラ
- 2) 桜の原産地はヒマラヤだが主に南麓
- 3) 桜の葉の化石(「ムカシヤマザクラ」)が日本列島の500～250万年前の地層から

- まさにcool headで.....でもheartの方は？
- もう一つの解決策
- 「起源」の言説：「起源が●●、だから●●の桜が本物or正しい」
- ←「正史authentic history」の言説空間
- 否定denyでも解体deconstructでもなく
- 解除cancellできないだろうか

1. 梅と桜の輪舞曲

1.1 花見の始まりは？

- 出発点はやはりcoolな事実探究から
- 「日本人は桜といっしょに歩んできた……」
というのが日本文化論の定説
- ところが実際には
- 『万葉集』では桜43首で梅132首（題含む）
⇒奈良時代の人にはむしろ梅の花好き
- 「平安時代初めに桜好きへ」といわれる

- 具体的には 9世紀後半ぐらいに
- 1)「左近の梅、右近の橘」から
「左近の桜、右近の橘」へ
- 2)『古今和歌集』では「花」=桜に
- ⇒「梅から桜へ交代」説

梅(神戸北野天神)



「梅から桜へ交代」説の内容

- ①平安時代の「国風文化」への転換の一環として
- ② 梅見は唐から輸入された外来文化で、本当はずっと桜を好んできた
- ③梅見とともに梅自体も移入された

並木誠士「日本人と桜」『桜さくら』（青幻舎,2006年）

平安時代以前には桜より梅の方が鑑賞の対象になっていたのです。……

奈良時代には中国にならった法律や諸制度があらゆる面で規範になっていました。文化の面でも同じでした。それが次第に自分たちの実情や気持ちに合うものを求めるようになってきて、日本的な文化が形成されてくるのです。そのうちのひとつに桜との結びつきがあります。中国では花といえば梅でした。中国伝来の梅の愛玩は、平安時代になると次第に桜への愛好へと変わってゆきます。外来のものを多く取り入れながらそれを自分たちの感性にかなうものへ変えていく、そんな日本人の外来文化に対する態度がここにも見られます。

桜の花への愛好を深めていった平安時代は、いろいろな面で日本的なものが熟成していった時期です。……

（12・13頁より引用）

- 日本史でも①②③はときどきみる
- かなり定説化？
- 「国風文化」とは何か をめぐる議論はいろいろあるようだが
- しかし
- そもそも資料や史料をみていくと.....

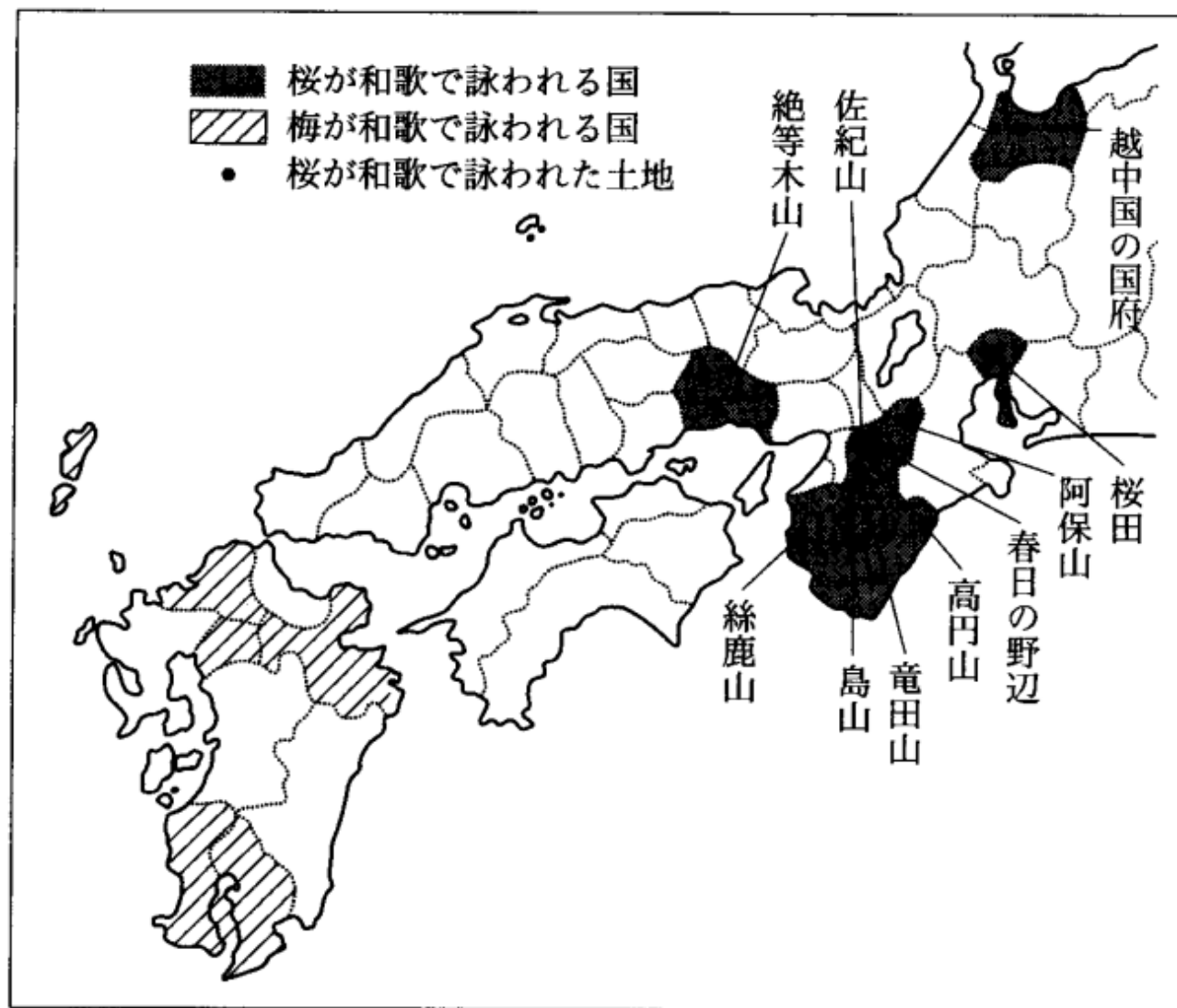
1.2 交代説の再検討

- まず命題③から
- → ×
- 弥生時代の遺跡から梅の木や実が発掘
- 魏志倭人伝(東夷伝倭人条)にも「梅」
- 少なくとも奈良時代の人にとっては
- 「昔からある樹」

- では命題②は？
- ②は二つの部分からなる
- 前半：「唐から輸入された」
- 後半：「本当はずっと桜を好んできた」
- 後半部から検証すると

古来から桜を見てた？

- 「本当は桜を見ていた」とすれば 外来文化から遠い地域では本来の姿に近づくはず
- 具体的には「東国」
- 『万葉集』の東歌には桜は・・・全く出てこない
- 『万葉集』で地名が特定できる桜の歌は19首で近畿地方周辺に偏る（有岡利幸『桜Ⅰ』法政大学出版局,48-49頁より、次の図も同じ）



『万葉集』の桜花歌と梅花歌の関係国の図。桜花歌は宮都大和国とその周辺国であり、梅花歌は大和国と九州に偏っている。越中国は大伴家持が国守となっていた。

*

有岡利幸『桜 I 〈ものと人間の文化史137-1〉』法政大学出版局、2007年、49頁。

- 命題②の後半 →どうも×くさい
東日本は桜の中心地なのに.....
- 王仁が仁徳天皇に奉った歌
「難波津にさくやこの花冬ごもり
今は春べとさくやこの花」
→古今集仮名序(紀貫之)は「梅の花」説
- 梅を歌わなかったわけではない

- 聖武天皇の諡号

天璽国押開豊桜彦天皇（あめしるしくにおしはらきとよさくらひこのすめらみこと）

⇒桜花が特に注目されるのも

奈良時代の平城京周辺からでは？

1.3 桜見る人、梅見る人

- 乱暴なまとめになるが・・・
- 日本語圏での「桜の歴史」は本当は
- ①梅も桜も昔からあり 歌われてもいたが
- ②花自体を鑑賞する営みは奈良時代に渡来してきた
- 『万葉集』の「花を詠める」「桜の花の歌」...
- →梅花も桜花も 橘花も萩の花も

- ③その後はずっと桜も梅も楽しまれてきた
 - 日記や物語での言及もほぼ同程度
 - 江戸時代には梅の名所もたくさんあった
 - 蒲田の梅屋敷など
-
- ④大正期以降に桜だけを見るように
 - =「染井吉野の春」の成立

- 桜見も梅見も奈良時代から
- 花を愛でる文化は中国から渡来した可能性が高い
- 長く続いていたという点では
- むしろどちらも日本語圏の伝統
- 明治以降に伝統の一つを忘れてしまう...

- 折口信夫「花の話」(『折口信夫全集第二卷』中公文庫、1975年、472-473頁)
- 「考へて見ると、奈良朝の歌は、桜の花を賞めて居ない。鑑賞用ではなく、寧、実用的のもの、即、占ひの為に植ゑたのであつた。……奈良朝時代に、花を鑑賞する態度は、支那の詩文から教へられたのである。」

2. 花と東アジア

2.1 梅見は中国の伝統？

- さらに命題②の前半を検証すると.....
- 花を愛でる文化が中国から来たことは事実
- 起源が外にある という意味では
- 桜の花見は日本語圏の伝統ではない
- では梅の花見は中国の伝統なのか？

- 漢文学での梅の詠われ方をみると
- 『詩経』から六朝文学までは
- 「花もだんごも」...ではなく「花も実も」
- : 梅は花もきれいで実も美味しくて良い
～
- そういえば桃も「花も実も」....

- 花自体を愛でるのは昔からの伝統ではない
- では最初は何？
⇒牡丹！



牡丹(下落合・薬王院)



牡丹の歴史をひもとくと...

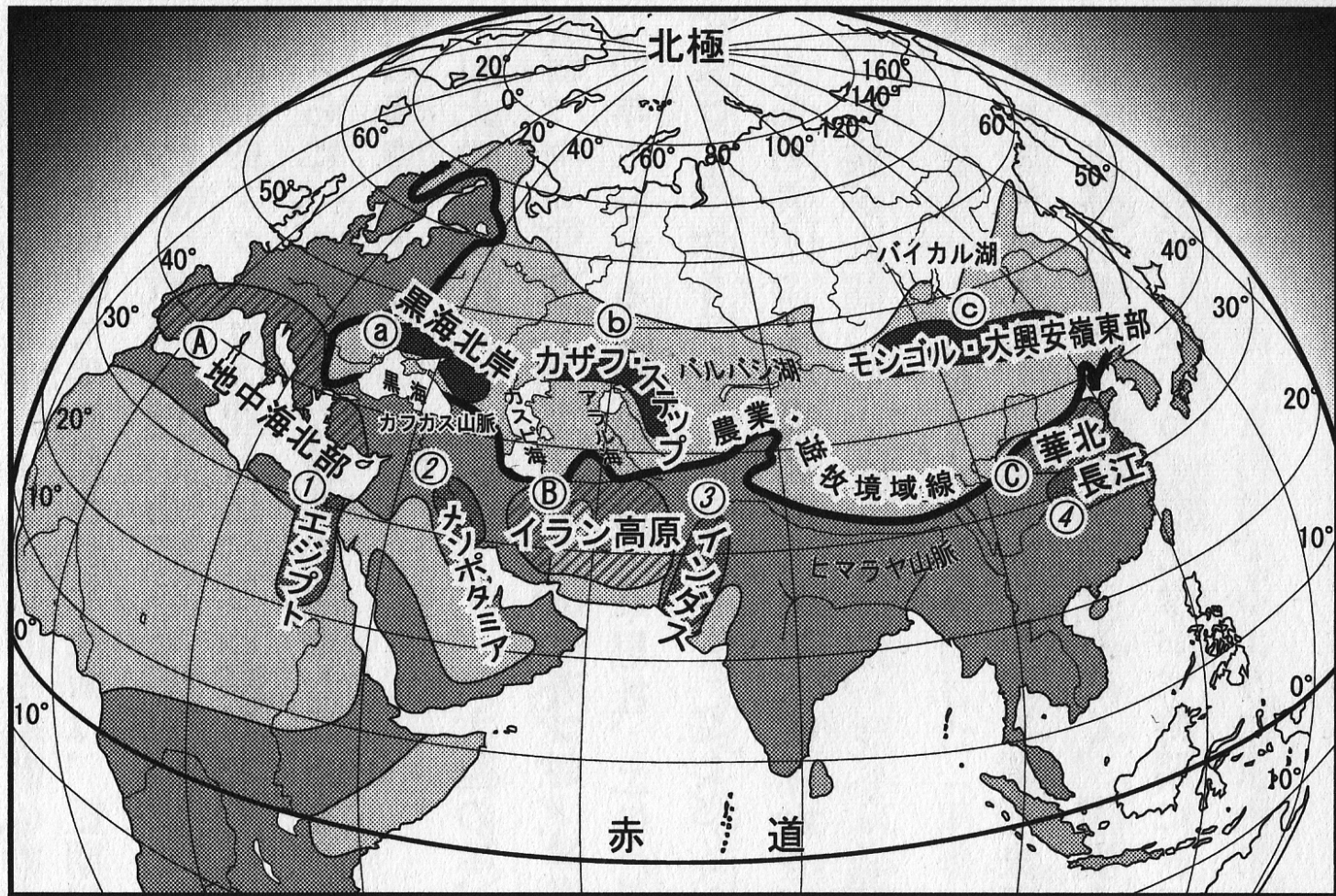
- 牡丹のブームはいつ？
- ⇒ 唐代のAD700年代前半
- 李白や杜甫が活躍した時期から
- 長安や洛陽を中心に流行していく
- 「花開花落二十日 一城之人皆若狂」
(白居易『牡丹芳』,809年)
- 日本でいえば ちょうど奈良時代！

2.2 流行現象としての花愛で

- 中国でも 花を愛でる文化は
- 昔からあったわけではない
- その意味では中国の伝統文化でもない
- 中国と日本で
- 花を愛でる文化に大きな時間差はない
- AD700～900年ぐらいに出現

多民族社会としての唐

- 唐という社会の特殊性 ⇒ 多民族国家
- 隋も唐も王家は漢系というより鮮卑系
- つまり 唐(と隋) ≠ 漢民族の社会
- 特に800年代前半までは北方や西方の遊牧民の文化が色濃い
- 地図で表すと.....(妹尾達彦『長安の都市計画』講談社、24、46頁より)



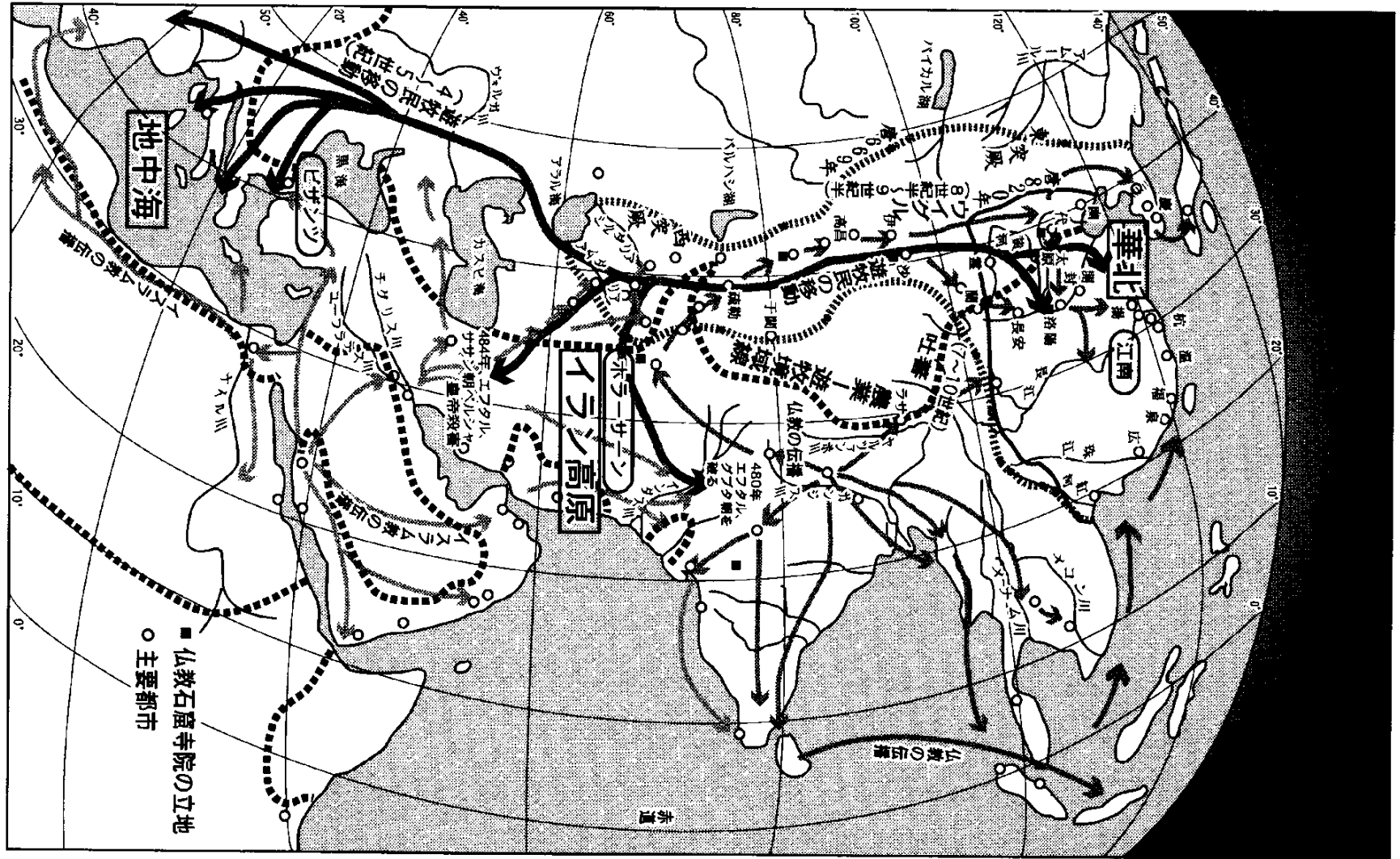
- ① 大河川流域の農耕地帯 (①②③④)
- ② 遊牧地帯 (a b c)
- ③ 農業・遊牧境域線の南に隣接する農耕地帯 (A B C)
- 遊牧地帯 (ステップ・サバンナ) ■ 農耕地帯

図6 ユーラシア大陸の環境と歴史 (妹尾, 2001年)

* 妹尾達彦『長安の都市計画』講談社、2001年、p.24 図6

4-10世紀のユーラシア

図9 世界史の第二期：4～10世紀（妹尾，2001年）



* 妹尾達彦『長安の都市計画』講談社、2001年、p.46 図9

長安はシルクロードの東の中心

- 西南アジア文化の大量流入
- : 胡商、胡酒、胡旋舞、椅子.....
- 女性の社会進出
- : 武則天や乗馬の習慣
- 仏教の隆盛

- →「異国趣味」というより
- 遊牧民主導の社会と文化

- 4-10世紀のユーラシア東部での大規模な文化と社会の交流と再編成
- そのなかで牡丹のブームが始まり
- 梅見の習慣も本格的に広まっていく
- 花を愛でる文化が中国にも根付いていく

2.3 梅花と桜花

- だとすれば
- ⇒ 日本に輸入されたのは 梅ではなく
- さらにいえば 梅見の文化でもなく
- ⇒ 花それ自体 を愛でる文化 なのでは
- (1) 花の種類は特に特定されず
例えば梅でも牡丹でも桜でも萩でもよく
- (2) その場所で最も適した花 が注目される

- そういえば
 - 天璽国押開豊桜彦天皇 の頃の奈良
周辺では.....
 - 仏教も西域文化も流行していた
 - 花を愛でる文化もその一つでは
-
- ⇒中国から日本へ というより
 - アジア全域での文化の伝播と変容の一環

3. 花見の起源を求めて

3.1 西から南から

- では花を愛でる文化はどこから来たのか
- 文書的な史料ではもう追いにくいが
- いくつかの手がかり
- (a)唐における西南アジア文化の大量流入
- : 胡商、胡酒、胡旋舞、椅子
- : 女性の社会進出、仏教

- (b)法相華文
- 花に大きく注目した文様のデザイン
- →花を愛でる文化と内容的に重なる
- 中国には隋の頃に 日本には奈良時代に
- →時間的にも重なる
- インドから西域経由で中国や日本へ？

法相華文_『正倉院展』目録表紙より

* 奈良国立博物館 平成22年(2010年)第62回正倉院展



* 奈良国立博物館『正倉院展六十回のあゆみ』思文閣、2008年



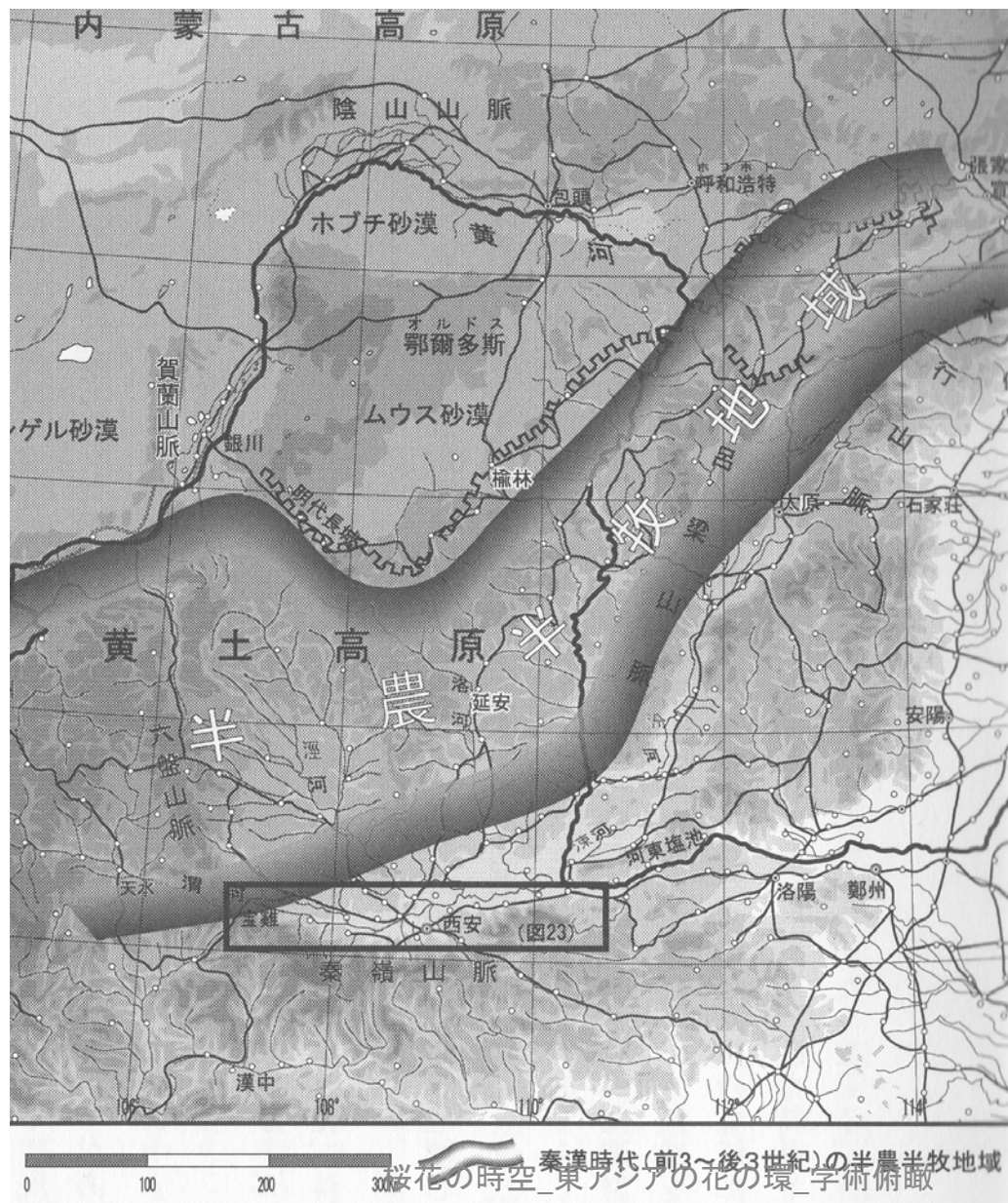
- (c)草原の春の景色
- 花だけが一気に一面に咲く



花のシルクロード？

- 花を愛でる文化もシルクロードで伝来した？
 - 西域⇒北朝～唐帝国の首都（長安や洛陽）
 - ⇒中国各地の都市へ
 - ⇒東アジア諸国家の首都へ
-
- 中国の花の文化も変容
 - →花自体を愛でるように
 - 牡丹や芍薬の流行 梅の詩文もかわる

長安周辺は農業-遊牧の境界地帯



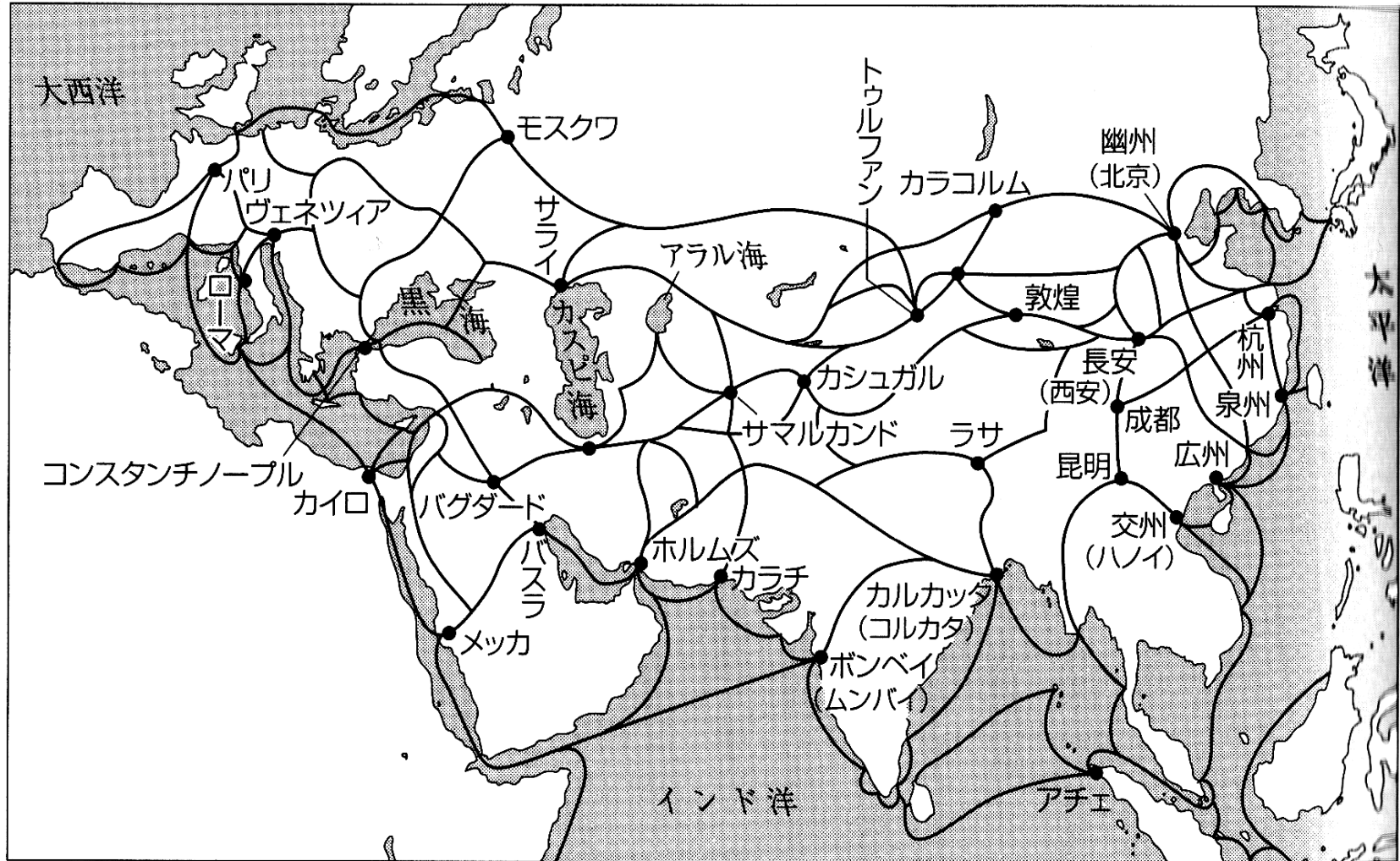
妹尾達彦
『長安の都市計画』
より

* 講談社、2001年、p.78 図22

シルクロードのネットワーク

森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社、2007年、65頁より

*



シルクロード=ネットワーク概念図 シルクロードは東西に限らず南北にも結ばれていた

- 日本では大宰府や奈良から各国の国府へ
- 長安の牡丹が平城京で桜に化身？
- 日本では桜に特にうまくはまった
- (a) 陽樹なので森林伐採の跡地に大量進出
- →律令制下で都市造りや寺院建立
- (b)花だけが先に咲くor一面の花色になる
- →特に強烈な視覚印象
- 新たな語源説「咲く＋や」

- 「梅から桜」交代説(＝梅見から桜見へ)から
- 「花のシルクロード」仮説へ
- 起源が外 という点では
- 日本と中国どちらも伝統ではない
- 各地域の独自の花を育んでいった 点では
- どちらも伝統
- 迎春祭祀＋花鑑賞の二重構造では...

3.2 「花のシルクロード」説の検証

- 仮説ができたなら 後は検証
- 検証のポイントになりそうなのは
 - (1) 時期的にあっているか
 - → まあいえそう
 - (2) 桜と等価な花が他にあるはず
 - → (2.1) 梅と同じような花はあるのか
 - → (2.2) 桜と同じような花はあるのか

- もう少し詳しくみていくと
- (2.1)梅花と同じような花は？
- ある → 菊！
- 菊ももとは食用 それに薬用が加わり
- 唐代に観賞用の菊が出現する

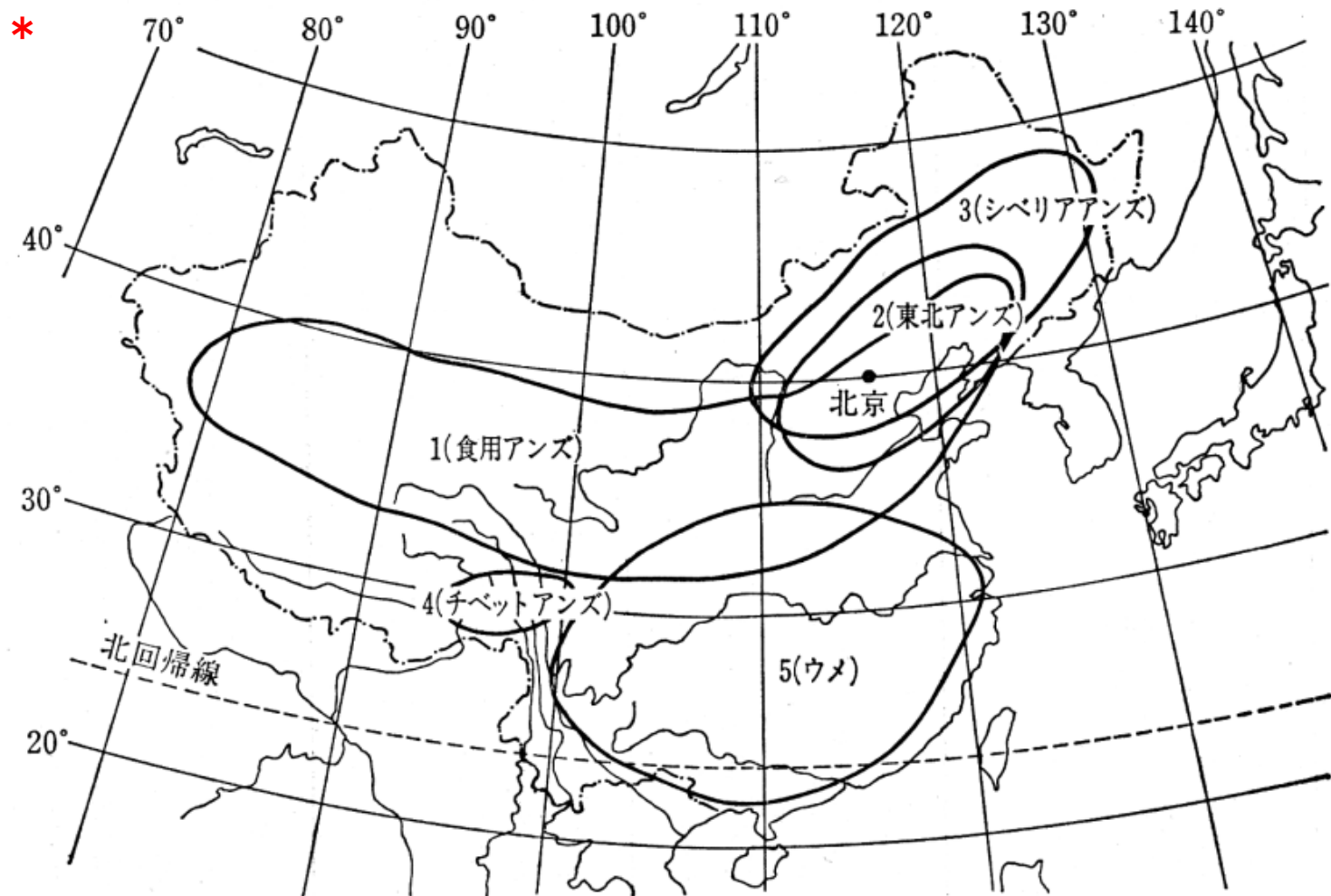
菊



- ちなみに 現代中国の国花候補は
- 梅、菊、牡丹、蘭の四つ
- このうち梅と菊と牡丹はほぼ同時期に
- 「愛でられる花」になる
- 蘭は少し遅れて宋代から
- 画題としての四君子：蘭、竹、梅、菊

中国におけるアンズ属の分布

小林章『文化と果物』養賢堂、1990年、86頁、原図は
俞徳浚『中国果樹分類学』農業出版社、1979年、44頁





鄭燮「懸崖蘭竹圖」北京故宮博物院藏

2015/9/25



郎世寧「仙萼長春 菊花圖」台北故宮博物院藏

桜花の時空_東アジアの花の環_学術俯瞰



Orchid
and
Bamboo,

Chrysanthemum,

Plum

wikipedia
(English)
より



- では
- (2.2)桜と同じような花は？
- これもある！
- 「蜀の海棠」 ＝ハナカイドウ
- 福建省～沖縄諸島の刺桐 ＝デイゴ
- 琉球大学の合格電報は「デイゴ咲く」だとか...

花海棠





デイゴ



* 写真: Takuye Photolibrary (<http://www.takuye.jp/>)

『おきなわ緑と花のひろば』より

<http://www.midorihana-okinawa.jp/>



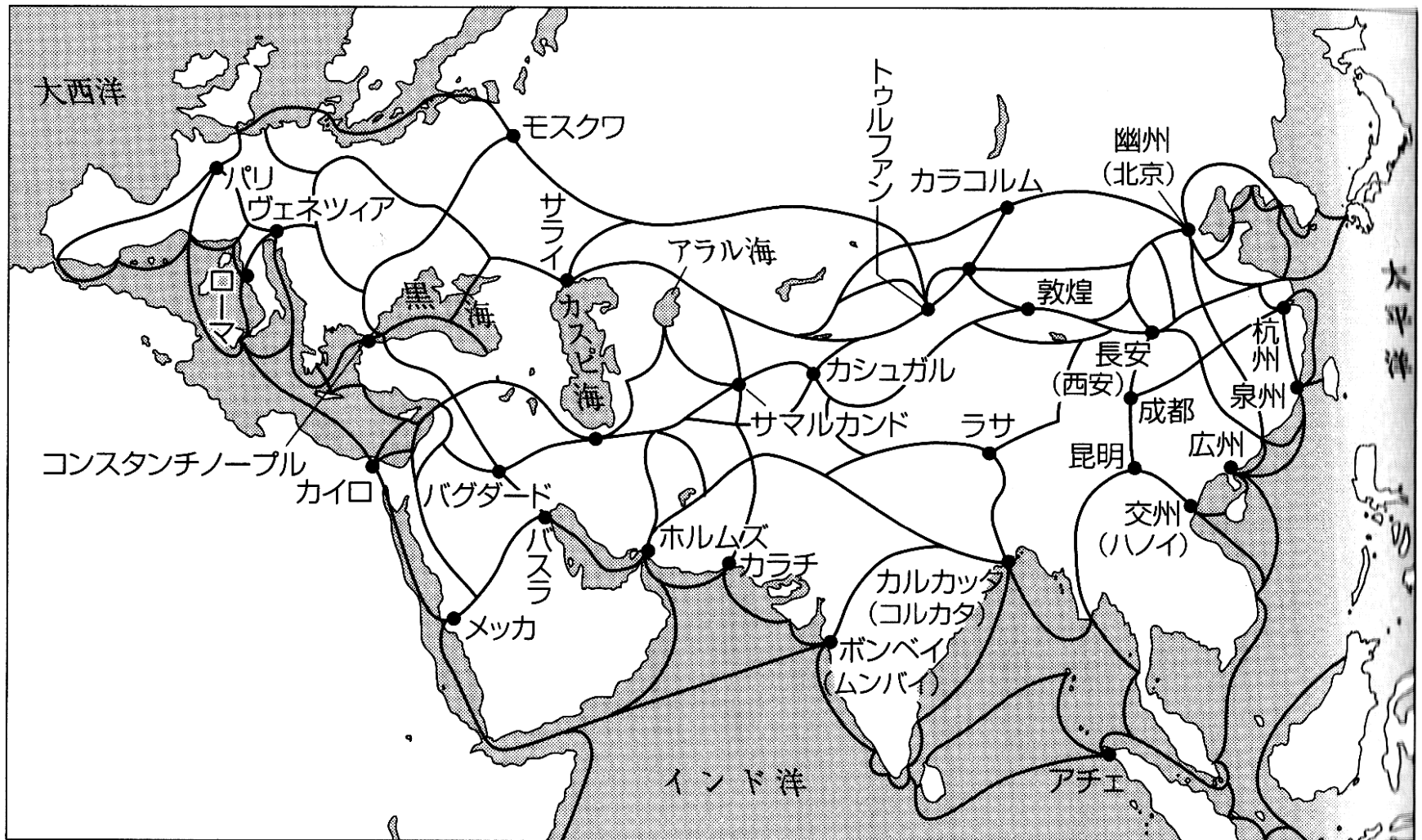
デイゴは沖縄が日本の北限。初夏4月から5月にかけて真っ赤な花を咲かせます。成長が早く、幹はごつごつと太くなり高さも10メートルを超え、また枝を横に張るので木陰を作るため公園や街路樹によく栽培されています。(同ウェブサイトより)

*

提供: 沖縄県 環境部 環境再生課

- 海棠を詠う詩は
 - (a) 700年代末に出現(薛濤「海棠溪」など)
 - (b) 800年代後半に定着し宋代に流行
 - (c) 主に四川省＝「蜀」の地域文化
-
- 桜の展開の時空とよく似ている
 - 江戸時代には「桜は海棠か」論争があった
 - ⇒(2.2)の事例になる.....かな？

シルクロードのネットワーク(再掲)



シルクロード＝ネットワーク概念図 シルクロードは東西に限らず南北にも結ばれていた

* 森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社、2007年、65頁。

朝鮮半島では？

- 四君子：蘭、菊、竹、梅が強いらしい
- 独自の花ではチンダルレ（からむらさきつつじ）？
- 花から先に咲くところは桜に似ている
- 東アジアの地域性を考える上でも示唆的
- 詩文に登場する時期は調査中
- 崔致遠説は？ 詩文上は「杜鵑(花)」としか

チンダルレ



Image by Jeffdelonge, from Wikimedia Commons (Ref. 2015/12/17)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rhododendron_mucronulatum01.jpg
CC BY-SA 3.0

3.3 桜のexoticism

- 桜に戻ると.....
- 最も古い桜の品種名は？ 「泰山府君」！
- 泰山は中国（山東省）の霊山 泰山府君はそこにいて寿命をつかさどる神
- 『平家物語』「桜町大納言」に出てくる
- 古い写本では「桜の長寿を泰山府君に祈った、それで泰山府君」



泰山府君の画 『古今要覧稿』(国立 公文書館所蔵)より

[http://www.archives.go.jp/
owning/monthly/1503/arch
ives7.html](http://www.archives.go.jp/owning/monthly/1503/archives7.html)

(国立公文書館ウェブ
サイトより)

*

似てませんか？_牡丹に(薬王院にて)



- 少し遅れて「普賢象(普賢堂)」
- こちらはインド(仏教)の神格 乗る動物もインド風
- 他には「御衣黄」
- これは中国宋代の牡丹や菊の品種名から
- 緑なのになぜ黄色？ 近縁と思われる鬱金と交錯したためか

普賢象(フゲンゾウ)



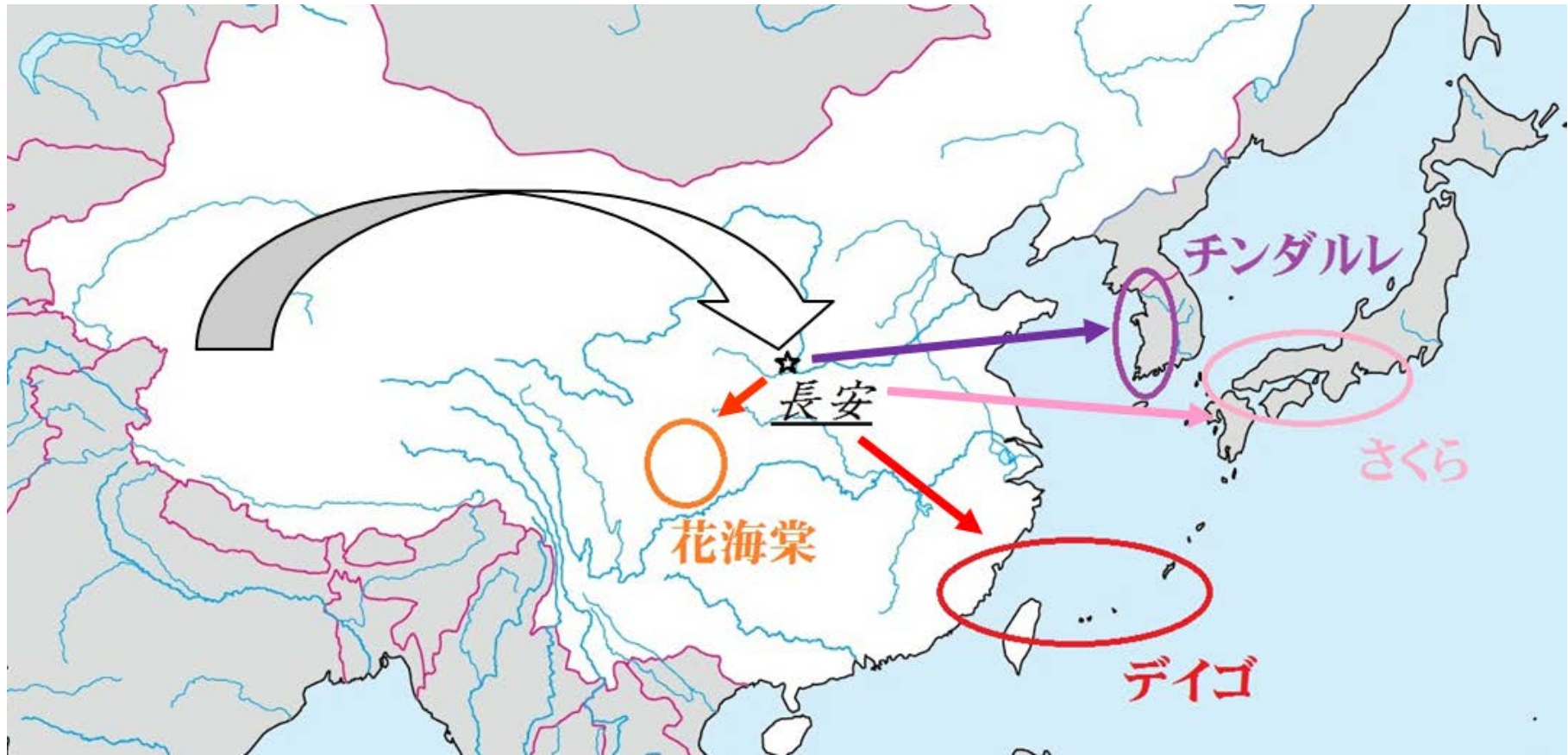


御衣黄(ギョイコウ) 緑なのに…



- 桜の古い品種名はむしろ異国的exotic
- 民俗学でも花 特に桜の「異界性」に注目
- 折口信夫「花の話」など
- 異界から突き出したハナ＝花
- 現世の外 だけでなく
- 列島の外 とのつながりもあったのでは

東アジアの花の環？



- 江戸時代の中に異国性が消えていく
- 『平家物語』の桜町大納言の話も
- 現行本の多くでは「花の長寿を天照大神に祈った、それが泰山府君」
-?? (命名説話として意味不明に)
- ⇒桜の時空の記憶の書換え
- 「花の鎖国」が起きた!?

4. 「桜の春／xの春」

4.1 似た社会と異なる歴史

- 「桜の春」の歴史をたどり直していくと
- アジア東部の国家と社会が見えてくる！
- 似た社会と異なる歴史
- という組合せ
- 「花を愛でる文化」という共通性の上に
- 「梅／桜／……」という独自性を育ててきた

- 現在の東アジアの各国家社会も
 - 急速な産業化という共通性の上に
 - その進行の時間差という独自性
-
- 具体的にいうと
 - 人口の急激な増加から減少への転換
 - 工業の拠点移転と分業体制 のなかで

- 高成長から中成長・低成長へと
- 順次移行しつつある

- 例えば「失われた20年」
- ←人口転換下での投資減退とデフレ
- 日本だけの問題ではない
- 韓国も中国も いずれはヴェトナムも

- それにともなって
- さまざまな共通の課題をかかえる
- : 家族の変容、社会福祉の必要性が増大、財政悪化.....
- → 似た社会 (= 共通性)

- その一方で
 - 現在どの課題が最も切実か はちがう
 - 例えば現在の中国なら急成長の歪み
 - : 格差、環境破壊、都市の拡大などなど
-
- 産業化の時間差
 - → 異なる歴史(＝独自性)

その結果...

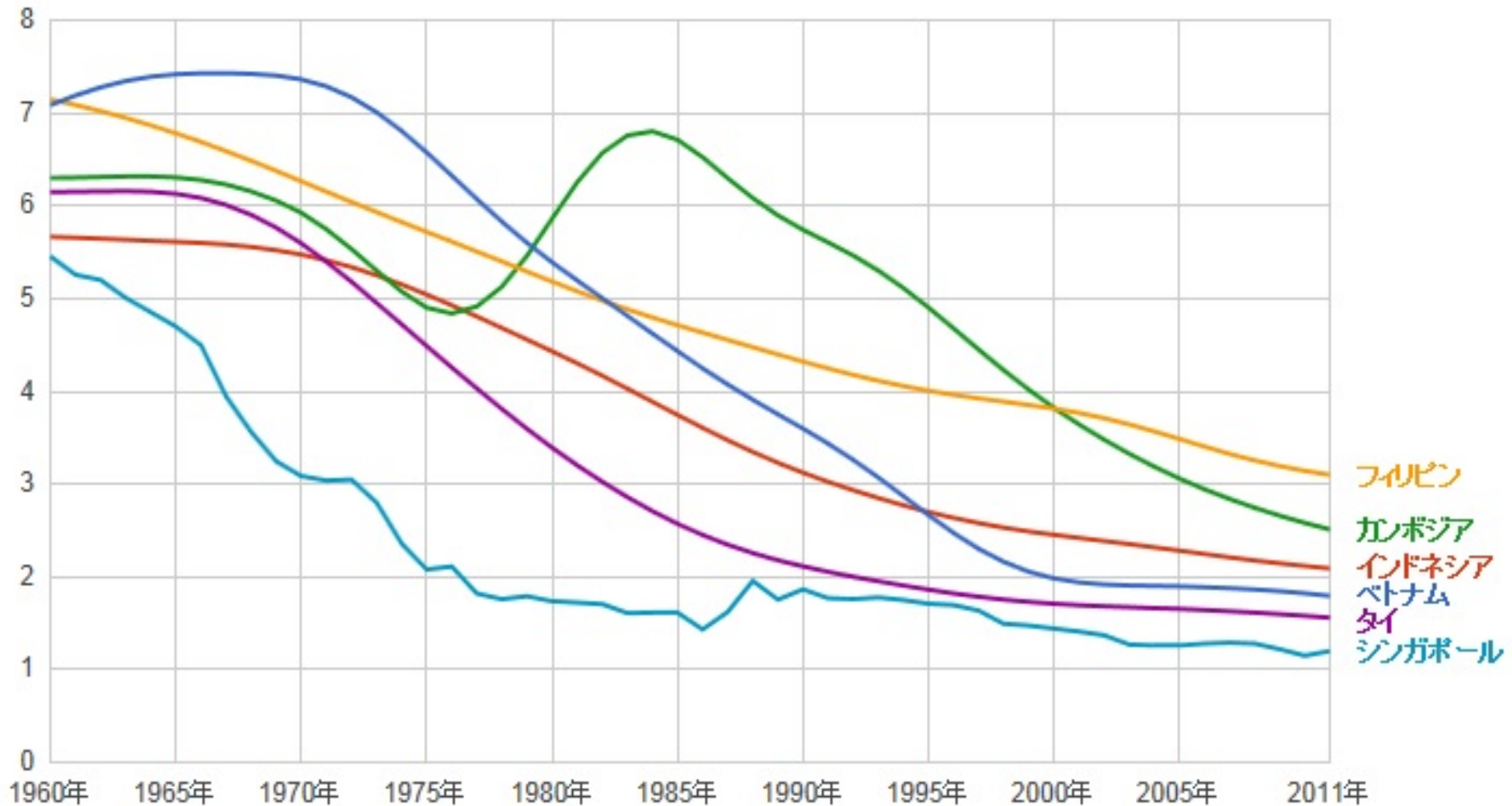
- 歴史をめぐる正しさ争いや本物争いが加速
- ←もともと「正史」の言説空間
- その上に
- 共通性の上に時間差があり、現状のちがいがあからこそ
- 序列づけへの欲望がさらにつのる

4.2 アジア東部の国家群システム

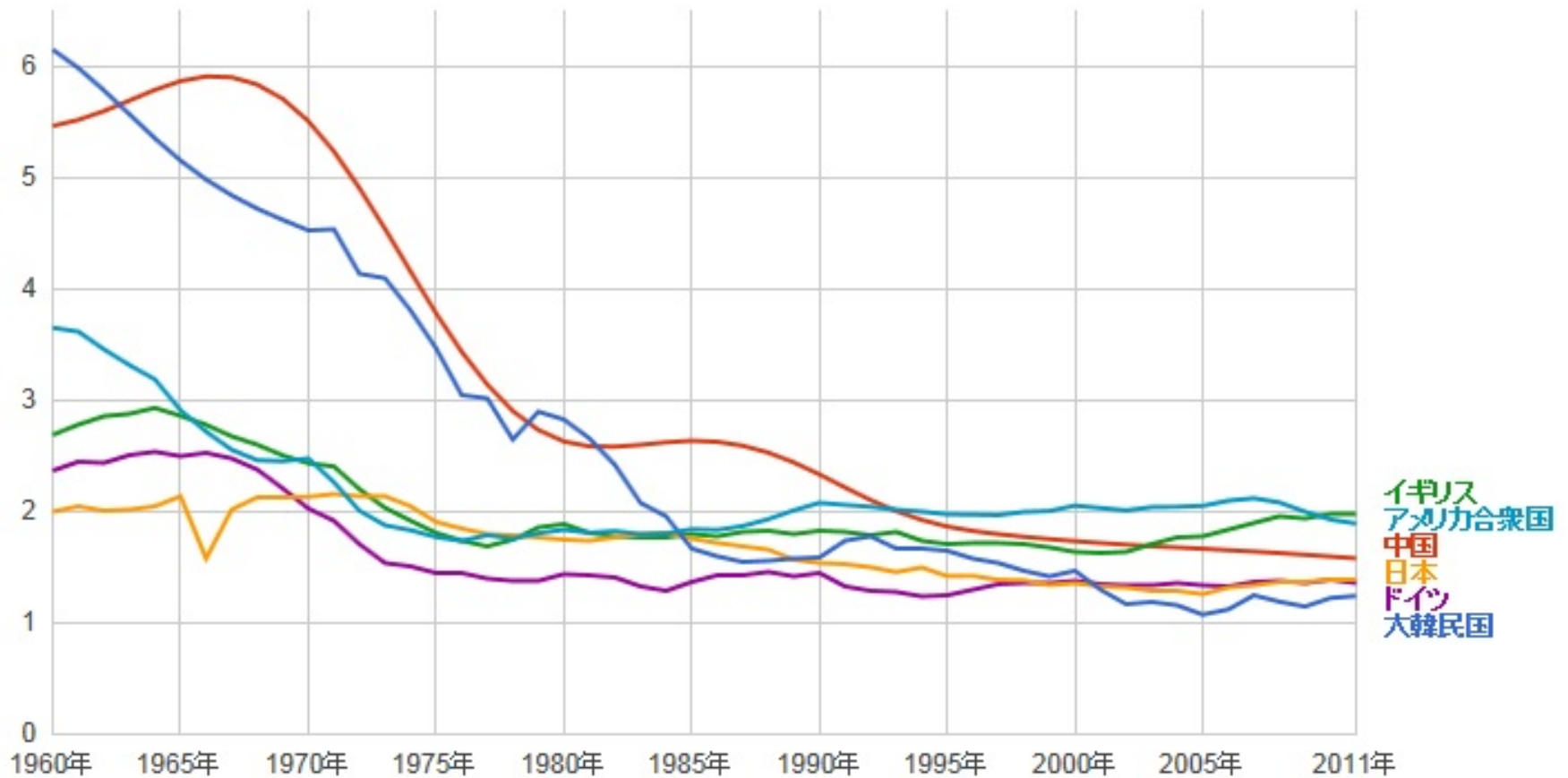
- 現在の東アジアの国家社会群
- →社会の高い共通性と歴史の強い独自性
- →ヨーロッパの国家社会群とはちがう
- 少なくともあと30年くらいはごたごたしそう
.....
- 東アジアに少し遅れて
- 東南アジアの国家社会も似た経過をたどってつついてくるだろう.....

東南アジアの出生率の推移

『世界経済のネタ帳』のHPを用いて作成



欧米と東アジアの出生率の推移_同上



- 中心的な課題は
- 「国家社会ごとの独自性と共通性をどう貼りあわせられるか」 ではないだろうか
- 共通歴史の構築しがたさは ヨーロッパの比ではない
- 欧州連合がどの程度存続するかも？なのに...

- その応用課題(練習問題)としての
- 「桜の/ "x" の春」!
- (1)共通性と独自性の歴史的実例として
- (2)題材自体も魅力的 特に専門家でない人々にも楽しめる
- →共通性と独自性を具体的なモノで体験
- →自省的な社会では特に重要

- (＝「こんなものか！」とわかる意義)
- (3)国家内での地域文化のとらえ方にも
- 応用できる
- 地域ごとにも共通性と独自性があるはず

5. 論理*head*と心情*heart*の 貼り合わせ方

5.1 花と文化と社会

- こうした知識と推論をつかって
 - 東アジアの課題をどのように解いていくか
 - ←論理と心情をどう貼りあわせるか
-
- やり方は一つではない
 - ⇒社会科学ではこれも大事！
 - つねに複数性へ開かれていくこと

- 使い方その1
- 比較社会的には
- 「起源と時間差の形而上学」の解体！
- →伝播の楽しさと本物争いの無意味さ

- 「梅桜交代」説の正体 = 本家争い
- 「起源に近い方が本物で正しい」という固定観念があるからこそ
- (1) 梅見が花見の起源なら桜見は贗物or劣化コピーだ と考えてしまい
- (2) 「本当は桜をずっと見ていた」という対抗神話を構築する

- 「花のシルクロード」説では
 - 花を愛でる文化という共通性の上で
 - 各社会ごとの花を育むという独自性
-
- 伝播は歴史的な事実だが
 - それによって
 - 独自の花の意義が消えるわけではない

- 伝播の元は必ずしも一つではない
- 1)法相華文はおそらくインドが起源
- ハスの花が原型？
- 2)花が一斉に咲く光景には草原の感覚も
- ←熱帯には明確な四季も花期もない
- 3)漢詩文は中国
- 特に南朝(漢系)の伝統

- 農耕／遊牧境界線近くの長安で
- それらが出会い →「花を愛でる文化」へ
- 日本に来ると
- 漢詩文は和歌に
- 春のイメージはより強烈に
- ⇔中国(華北)では四季咲き志向も強い
- 例えばバラの四季咲きや秋の菊など

- その意味で
- 花のシルクロード！
- 4-10世紀のアジア全体での文化の伝播と交流と変容の一環
- (.....まあ習近平さんの「一帯一路」よりはelegantなのは(^^.....)

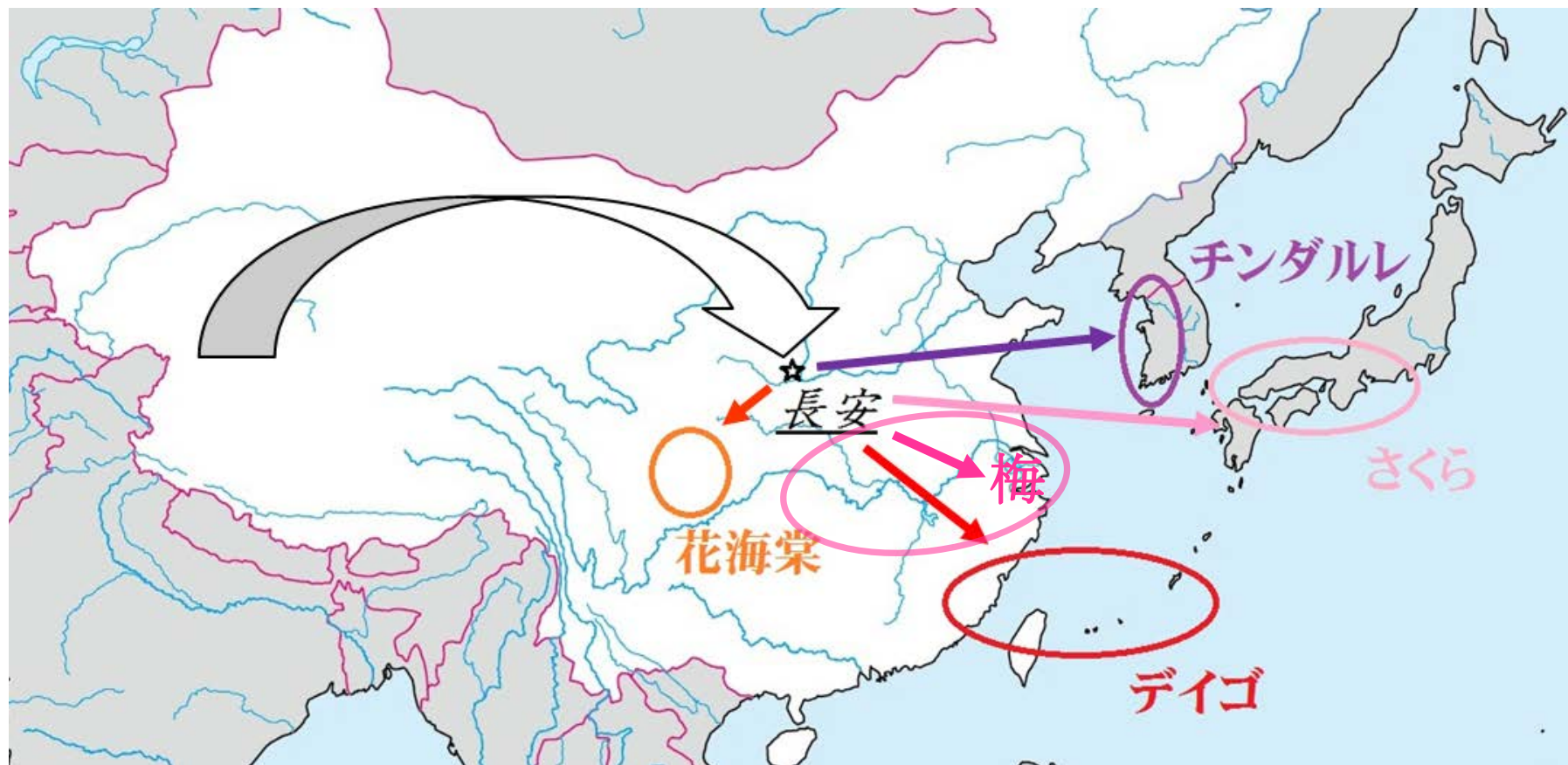
- 実は
- それと同じような伝播と交流と変容のパターンをみせる事象が
- 今から150年前にも起きている
- ⇒ 東アジアの産業化(近代化)

- 「花のシルクロード」説での 唐の長安
- にあたるのは
- 日本帝国の東京
- 西ヨーロッパやアメリカから 産業化（近代化）が東京周辺に伝播
- それがさらに日本の各地や東アジアの各地に伝播していく
- ⇒ 共通性の上で独自性が育まれる

東アジアの産業化 では



東アジアの花の環 では



5.2 等価性の論理

- 花を愛でる文化 と 産業化 の等価性
- 例えば「東アジアの花を愛でる文化は唐の長安が起源で、そこでの姿が本物だ」
- とするのであれば 同じ根拠で
- 「東アジアの産業化は日本の東京が起源で、そこでの姿が本物だ」
- といえる

- 逆に「日本の桜の花見は独自のもの」
 - とするなら
 - 「韓国や中国の産業化も独自のもの」
 - になる
-
- どちらの形で歴史を書くのもありうるが
 - **二重基準double standardはダメ！**

- 「自己論理autology」(←N.Luhmann)
- 自分にあてはまることは他人にあてはまる
他人にあてはまることは自分にあてはまる
- 共通性と独自性を
- 起源と時間差の形而上学ではなく
- 自己論理の等価性に 結びつける
- ⇒過剰な意味を解除cancelしていく

- ⇒等価な・複数の歴史を考える
- 意義と可能性
- 「自分が正しく他人が正しくない」ではなく
- 「自分が正しければ他人も正しい」「他人が正しくなければ自分も正しくない」
- **桜花の時空**はそういう事例でもある